

ここに注目！



被災地においてコミュニティと経済活動の中核を担う

ポイント

東日本大震災後、地域住民の生活不安の早期解消を目指し、町内で最初に商店街として復旧。

「FOREVER YAMADA 震災前より魅力的な山田町へ」をキャッチコピーに、仮設住宅生活者向け移動販売や、「震災語り部」による新サービス等を提供。

【現状分析及び課題抽出】

Plan

地域再生のリード役へ！

震災後、町内人口が 18,149 人(平成 23 年 5 月)から 1 年半で 1,158 人(6.3%)減となり、商業・サービス業者の約 4 割が廃業を見込んでいるといった状況を背景に、住民の生活への不安や事業者の事業再開・経営への不安があったことから、本組合が商業復興のリード役となり、地域社会の再生、地域活力の向上を担うことを目標にした。商業者の早期復旧による住民の生活不安の解消、仮設住宅への広域的なサービス提供による利便性の向上、地域産業(農業、水産、観光)と連携した地域活性化に率先して取り組むこととした。

【対応策の優位性】

Do

目に見える、きめ細やかな事業展開

早期の生活不安の解消を目指して、「スマイルガーデン山田商店街」など 7 店舗が平成 23 年 8 月に自主再建し、仮設店舗よりも早く、町内で最初に商店街として復旧、営業を再開した。また、分散する仮設住宅生活者の利便性を確保するために、移動販売、訪問サービス(飲料、弁当、食料品、貴金属等販売・修理)の充実を図った。さらに、「いちび」の復活開催による農水産業者の販売機会の拡充、「震災語り部」による国内外の観光客や職場研修者への新サービスの提供、地域産品を使用した新商品「ほたてせんべい」・「山田豚の餃子」や体験型まちなか観光「荒巻鮭オーナー」などを実施した。

基本データ

新生やまだ商店街協同組合

所在地:岩手県下閉伊郡山田町八幡町

人口:約 2 万人(山田町)

会員数:22 名

店舗数:22 店舗(買回品小売店 0、最寄品小売店 13、飲食店 4、サービス店 2、その他 3)

商店街の類型:近隣型商店街

主な客層:会社員、家族連れ、高齢者

関連 URL:<https://ja-jp.facebook.com/shinseyamada>

商店街概要

東日本大震災の被災後、スーパーと「スマイルガーデン山田商店街」の 7 店舗で平成 23 年 8 月に自主再建し営業を再開した。平成 24 年 10 月に本設商店街形成に向けて「スマイルガーデン山田商店街」の事業活動に賛同する 17 店舗で法人化。復興が遅れている中心市街地で定期的にイベントを実施するなど、地域コミュニティや賑わい創出の拠点となっている。また、県内外に情報発信を行い、町全体を活性化するため、地域産業と連携して広域的な取組も行っている。



復活させた「いちび」の開催

【効果の評価及び改善策】

Check-Action

多くの方々の利用・参加をいただきました

移動販売は、平成 25 年 1 月から実施し、4 ヶ月で 4,028 人が利用している。人件費負担が大きいため、経済産業省の補助金を活用し専用車両を購入、採

算性を改善し継続可能となった。

「いちび」(年5回開催)参加者は、平成25年には1回当たり200人だったが、無料送迎バスの範囲を拡大し、学生と連携することで、平成26年は同300人に増加した。

「震災語り部」は、平成25年には196団体3,019人が利用、飲食店やタクシーとの連携で付加価値を増加し、さらに、出張語り部として、県外へ派遣することで、山田町の情報発信を強化した。体験型観光の新巻鮭オーナー制度も40人の参加者があり、新たな観光メニューとして成果を上げた。

[実施体制等]

地域の関係者と密な協力体制を維持

平成24年10月の法人化後、月2回、定期的な集まり、復興まちづくりの勉強会や検討会を行っている。若手経営者が中心となり、知識、経験豊富な経営者が支える構成で、行動力のある体制を構築している。事業実施にあたっては、地元商工会の協力を得て、「い

ちび」においては、障害者支援施設「望みの園はまなす」や地元社会福祉協議会の協力により送迎バスを運行し、イベントの企画や実施においては、地元の高校生、大学生が参画、連携して実施している。「震災語り部」においては、5人で構成する女性語り部グループが中心となり、全10名で店舗の繁忙期にも震災語り部事業を継続できる体制を確保している。



「震災語り部」によるガイドの状況



キーパーソン

新生やまだ商店街協同組合
理事長 昆 尚人

やる気の連鎖から笑顔の連鎖へ

基幹道路が未整備、営業再開用地も未定の中で、国道45号沿線で早期再開を目指す事業者が組合を設立したのは、この地で復旧し活動をしていくという決意表明でもあります。

現在も一部は仮設店舗ですが、22事業者が一体となって、買い物弱者対策、地域資源活用、震災語り部などへの取組を進めています。

「いちび」は、企画、準備に時間がかかり、少数の商業者では負担が大きい事業でしたが、農業者・水産業者を含めた活性化を目指し実施しています。現在、頑張っていることが周知され、町内外から高校、大学、団体の協力を受け、内容も充実し参加者が増加しています。街に賑わいを取り戻したいという想い、やる気が連鎖して、地域の方々の笑顔につながっている手ごたえを感じています。

町の元気を商店街から発信

商店街は、事業者のやる気や元気、町の活力を直接地域の方々に発信できる場であり、地域の方々が復興に向けた活気や賑わいを実感する場であると考えています。同時に、観光で訪れる方々には、町の魅力を体感する窓口となる必要があります。

農業、水産業、観光産業との連携として、語り部を中心とした街なか観光や、早採りわかめ、のしか造りなどの体験型観光などの充実のため、新たな観光メニューの企画、多様な情報発信を行い、商店街の枠を超えて新たなチャレンジをしていきます。

地域課題となっている若者の定着できる環境づくりは、若い世代が中心となって、町や仕事を体感、体験するサポートをし、高校生や大学生との連携イベントなどを通し、町の魅力を共感できる機会の創出に取り組んでいきます。

町の元気を支える商店街として、地域産業と一体となって、町にやる気、元気、笑顔を提供していきます。

「FOREVER YAMADA 震災前より魅力的な山田町へ」